Faulkner 文学における愛と死の意味 (I)

菊池　昭

1 Young Bayard と弟 John の関係
2 Quentin の死および Christmas, Burden の愛の意味
3 Popeye および Temple について
4 死の否定——後期の作品 (" Wild Palms," *The Hamlet*) にみられる「愛」の変化

［1, 2は (I), 3, 4は (II) に収める。］

1

Iliad, Odyssey 以来今日に至るまで，文学が一貫して追い求めて来たものは，現実をどのようなものとして解釈し，それをどのように描出するかということであったといえるだろう。これはつまり，「現実とは何か」という問題と，それに対する文学者個々の解答ということであるが，この「われわれにおける現実」——すなわち「人間的事象」——の解釈ということには，当然のこととして人間そのものの解釈——「人間とは何か」の問題が含まれており，それについての解答も同時に求められているはずである。

すなわち，例を先ず文学の草創期にとっていえば，現実を解釈しようとして，当時の人間はしばしば，自分たちの理解力を越えたある力が世界を支配していることに気づかせられたということがあったと思われる。例えば旧約聖書（ヨブ記）は，神を信ずることの厚い一人の善良な人物が，彼自身とは何ら関係のない強大な力によって，突然絶望的境遇につき落される顚末を語るが，そのときこの Job なる人物は，この世に生れて来てそうした不可解な苦難を受けねばならぬ人間とは，一体何であるのかという根源的な疑惑にとらわれる。古代ギリシャ人は，人間の思慮を越えるこうした力——外側から人間に働きかけ，それを破滅に導く超自然の力を最も鋭く意識して，それ

に「運命」という名を与えるのだが，更に彼らは，こういう不可解な魔力が彼ら自身の内部にも存在することを，——外部から働きかけて来た力によって内部が変質したというよりも，人間なるものがもともとその内部に「自分の思慮を越えたあるもの」を抱え，しばしばみずから止みがたく破滅に向ってつき進むものであることを認識したのであった。例えば Oedipus は，この人間の内部に住まう不可知の力に突き動かされて，狂気のように一つの問題を追いかけまわすのだが，その問題とはつまる所，「自分は誰なのか」ということであったのであり，そしてこの「おのれとは何ものか」が「人間とは何か」の問いかけの変形であることは，明らかなことなのである。

つまり文学は，基本的にわれわれにおける「現実とは何か」とその現実の中での「人間とは何か」という二つの問題を繰り返し考えて来たし，今後も考えつづけて行くものであるといえるだろう。

この二つの問題は，しかしそれぞれ別個の二つの事柄なのではなく，一つの物の異なった両面でしかない。例えば Faulkner は，"I was simply trying to write about people."[(1)] と語るが，そのためには "environment——what he [a writer] knows" を使うこと——すなわち，先ずしっかりした現実把握が必要なのだとつけ加えることを忘れていない。

つまり，作家の力点の置き方によって，二つのうちの一つだけが問題になっているようにみえることがあっても，そのとき他の一つの追求は必ず同時になされているものであり，それがないところに文学が成立することは絶対にありえないのである。これを Faulkner に即していえば，彼は南部という現実に目を据えつつ，先ずその中に生きる人間はどういうものであるかを考えて行くということになるわけだが，[(2)] さて一方，この「人間」なるものは，「多くの人々が何かを求めており，そしてその求めるものは大抵愛なのだ」[(3)]

(1) Frederick L. Gwynn and Jaseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University* (New York: Random House, 1959), p. 58.

(2) 力点ということからいえば，Faulkner が南部という「現実」に力点を置き，その「現実」とはいかなるものかの問題と真正面から取り組むのは，*Absalom, Absalom!* においてである．

(3) Gwynn and Blotner, *Faulkner in the University*, p. 95.

という Faulkner のことばの通り，生きている限りは何らかの愛を求めつづけ，やがて避けがたく死んで行くものである以上，「人間」を考えようとするならば好むと好まざるとにかかわらず，愛と死の問題が先ずその考察の基本的な中心にならざるをえないものであろう。愛とはもちろん男女の間の愛だけに限られるものではない。しかしそれはしばしば最も直截的に男と女の関係によって示されることも事実なのであって，このことについて Faulkner は次のように述べるが，それは彼の文学における愛のテーマの重さを明らかに示しているといえると思う。

> ... —it [love] don't have to be love between man and woman, it's to be one with some universal force, power that goes through life, through the world. It could take the form of—the object of it could be a man or woman, because that is a part of man's or woman's instinctive nature to have an object, an immediate object to project that seeking for love on. (sic)(4)

さて，ヴァージニア大学の学生の質問に答えて，Faulkner は更に彼の文学を理解する手がかりとして，先ず *Sartoris* を読むようにすすめているが，この発言はかなり重要な意味を持っているように思われる。なぜなら，彼はつづけて「*Sartoris* には私の経外典（アポクリファ）の萠芽がある。その中には〔以後経外典を形づくって行くのに必要になる〕多くの人物たちが登場させられている(5)」と語るのだが，経外典，つまり，作品——の "germ" とはただに登場人物についてだけいうのではなく，その後に発展する思想の芽という意味でもあったと考えるのは極く自然だからである。

事実，この作品の主人公 Young Bayard——死ぬためにだけ生きているようなこの無頼の若者の生き方，物の考え方に，しかしわれわれは，この作品以後の Faulkner がその 30 才代を通じて一貫して追求した，「ここにいるおのれとは何か」の問題——喪われた identity と，愛と死を通してのそれ

(4) Gwynn and Blotner, *Faulkner in the University*, p. 95.
(5) *Ibid.*, p. 285.

の再発見という問題が，すでにかなり明瞭なかたちであらわれていることに気づくのである。

Sartoris は，いうまでもなく Young Bayard の死に至る願望をめぐって展開する。一体この若者は，なぜあのように死に急ぐのであろうか。双子の弟の戦死が自分の責任であると考えたから，というのでは辻褄が合わない。彼と弟の死との関係は余り論理的に説明されないのに対し，祖父の Old Bayard を死なせたのは明確に彼の責任だが，しかも彼を死の方向へ駆り立てているのはこの祖父ではなくて，終始弟の Johnny であると言って過言ではあるまい。ということは，Young Bayard が，誰であろうと誰かの死に責任を感じて死のうとしているのではないということである。

Faulkner は，Young Bayard が自身の肉体についてどのように考えていたかを，"... that body which he [Young Bayard] must drag forever about a bleak and brarren world with him."[6] ということばで示すが，この若者における死の希求とは，先ず自身の肉体を抹消する願望であったことに十分な注意を払いたい。

> ... and the long, long span of a man's natural life. Three score and ten years to drag a stubborn body about the world and cozen its insistent demands. Three score and ten, the Bible said. Seventy years. And he was only twenty-six. Not much more than a third through it. Hell.[7]

この男は，Miss Jenny と妻の Narcissa がごもごも語るように，「誰をも愛さず，赤ん坊を愛することさえしないだろう」[8] し，「生涯において，John のほかはだれをもこれっぽっちも好きになったことがない」[9] 人間なのだが，そうであるとすれば，Miss Jenny のいうこの "cold devil" のような彼がなぜ弟だけを愛するのか，あるいはむしろ愛さねばならないのか，そしてま

(6) *Sartoris* (London: Chatto & Windus, 1964), p. 118.
(7) *Ibid.*
(8) *Ibid.*, p. 220.
(9) *Ibid.*, p. 41.

た，そのことと先述の肉体破壊の願望とは彼の中でどのようにつながっているのか，あるいはそこにはつながりなどというものは何もないのか——当然ながらこうした疑問が湧いてこざるをえない。

このことを考える上で，Sartoris 家の伝統とそれに対する John, Bayard それぞれの反応の仕方についての Olga Vickery の分析にはかなり示唆に富むものがあると思われるので，彼女の説を二，三引用しながら論を進めてみたい。(10)

Vickery は，Sartoris 家を考えるとき，この家門の定置者としての Colonel John Sartoris の影響を抜きにしては考えられないことをいう。つまりこの人物は，その生涯を代々語りつがれて行くうちに，次第に Sartoris 家のものにとって，内部に弱さや矛盾もはらんでいる具体的なひとりの人間であるよりは一個のシムボル——"Sartoris" そのものになってしまい，かくして彼の生き方が，今や子孫の生活に至上命令的な力で影響して来ることになると述べる。(11)

ところで John, Bayard の名は Sartoris 家の4世代を通じて繰り返し用いられるわけだが，そのことの意味を Vickery は，「単にことばによる過去の繰り返しなのではなく，その名を持つものは，行動においても同じであるべきという義務をつくることだ」と捉え，更に Bayard は Sartoris の一員

(10) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1964), pp. 18–21. 参照.

(11) Vickery は，Young Bayard の死に急ぎの原因を結局ここに見出しているのであり，強力な先祖の影響下に生きることは，ある個人をしてみずからの経験を生きるのではない，単なる死者讃仰の儀式化，形式化された生活を生きるように強いること——つまり，生きた人間の生命を否定することであるが故に，その個人のうっ屈した内的生命はついに激烈な行為となって爆発せざるをえないというのだが，しかしそうであるとすれば，この爆発が子孫のうちなぜ Bayard にだけ顕著に起ったのかという理由は明確にされないし（Johnny の死は単なる冒険心の結果である），更に重要なことは，もし Bayard の行為が，彼自身における内的生命の噴出であるならば，それは家族伝統に対する反抗を意味するはずだが，彼の行為は明らかに反抗ではなく，伝統への回帰，それとの完全な合一を目指したものであった．Vickery もつまる所，Bayard が反抗ではなくむしろ伝統に連なろうとしたと考えるのであり，彼女の理論ではこの点の矛盾は解決されない．

たることを自覚するためには，「自分の本性に逆ってそうであることをみずからに強いねばならぬ」のに対し，「John は選択によってではなく，生れつきの資質によって Sartoris なのである」と述べるが，これは重要な意味を含んだ見解だといえるだろう。なぜならば，この Vickery の分析は，*Sartoris* の中で名前を出されている John が，実は単なる Bayard の弟なのではなく，まさに Colonel John Sartoris その人——つまり "Sartoris" そのものであることを，われわれに知らしめるからである。

Bayard は Sartoris 家の真の一員たるべく，必死の努力をする。多分 Vickery が推測するように，彼は弟と自分を比べてみたとき，自分が "Sartoris" としては多々欠けるところがあることを——言いかえれば，自分を Sartoris 家の一員として主張し切れない危惧，その意味において自分の identity を見失ったような怖れにとらわれていたに違いないのである。かくして彼は，あいまいな自己の identity を確認するために，生れながらにして "Sartoris" である弟の生き方を見習おうとする——Vickery ふうにいえば弟の行為をおのれの行為の "touchstone" にするのであり，これがつまり，Bayard が John だけに心を向ける理由なのだが，しかし行為の表面的な模倣だけでは真に "Sartoris" たりえないことが明らかである以上，Bayard として採るべき手段はただ一つ，みずからが John そのものになり切ること，つまり，John と完全に合体することによって "Sartoris" となること以外にはないのである。

だが他との合体を求めて，しかしそのとき人間は自分の肉体が，（あるいは合体すべき当の相手の肉体が），堅牢な障壁となって両者の間に立ちふさがることに気づかねばならない。Bayard が自分の肉体を "stubborn" と呪い，"I've been good too damn long."[12] と叫んであれほどまで死を求めつづける理由はまさにここにある。他との合一ということを単なる比喩に終らせないためには，人間は先ずみずからの（あるいは他の）肉体を破壊しな

(12) *Sartoris*, p. 93.

ければならないのである。Bayard が死ぬのは，John の戦死に責任を感じたからなどでは決してない。おのれを他に重ね合わせること，おのれを捨てて他のものと完全に同一になること――まさにこのためだったわけだが，一方愛という立場からみれば，これこそ愛の極限の姿であり，"cold deril" などといわれる Bayard だが，しかし彼がこの世で心を注いだただ一人の人間である弟に対する愛情は，純粋で徹底的であったことを，それは示すといえるであろう。

かくして自己を自己たらしめるものを求めて，自分の意志で選んだたった一人の他者と完璧の合体を遂げること――これが *Sartoris* における Bayard の愛と死の意味であることを，われわれは知るのだが，それは更にこれ以後 Faulkner が一層深化させ多様化させて行く思想の基調となるものであることを，以下に明らかにして行きたい。

2

Bayard が，自分について "Sartoris" からはみ出たもの，その意味で身元（アイデンテイテイ）のふたしかなものという意識を持ちはじめたのは，直接には第一次大戦に参加したことによるであろう。彼の経験した戦争は，語り伝えられる Colonel Sartoris のそれとはまるで異なり，ただむなしく無残なもので，自分を Sartoris 家にふさわしい人物たらしめる栄光をそこで獲得できるどころか，彼は自分自身が，そのむなしさ無残さに圧し潰されて行くのを感じたのであったろう。自分をつかむこと，"Sartoris" であることをたしかめること――これが彼の求める一切であったわけだが，このことを裏返していえば，彼にとって "Sartoris" 家とは，その生活を律するところの疑問の余地のない準繩的存在，むしろ人間における権威と威厳の完全無欠な体系であったのだということになる。

だが果してそうなのか。Faulkner が作家としてのきびしい目を育てて来るにつれて，彼の周囲の現実が，実はこうしたロマンティックな一種の伝統礼讃などは通ずる余地のない，どろどろした泥土のようなものに満ちたもの

であることを悟り，また悟らざるをえなくなって行ったのだと考えたい。目をしっかり開けて眺めれば，南部は頽廃し切っていたのである。しかも南部をかく頽廃させたものは，ほかならぬ南部の名門——南部的倫理を集約的に体現していると考えられて来た，まさにあの誇るべき「家」そのものであることを Faulkner は知らねばならなかったのではないか。南部において名門とは何であるのか。作家として真剣に「現実とは何か」の問題に取り組んだとき，彼はこの名門なるものが，黒人奴隷の汗と血の上に築かれたもの，それなくしては決して成立することのできなかったものであることに気づかねばならなかったであろう。とすれば，名門の一員であることだけで安心していていいのか。それが本当に「自分」の身元をはっきりさせることなのか。黒人の人間性を犠牲にして出き上った名門ならば，そこで語られる美徳とはただ自分たちの権力保持に都合のよい便宜的ルールにしかすぎず，人間全体とは全くかかわりのないもの，だからこそそれは当然に頽廃の道を歩まねばならないし，むしろその意味において名門の一員たることは，反って自分を真の「人間」から引きはなしてしまうこと，厳密には「人間」としての identity を失わせること，少くともそのとき人々は，自分が何ものであるかを本当には決してつかんでいるのではない，ということなのではないか。——Faulkner の疑問は深刻であったろうが，しかしこれは，南部人であると同時に作家である彼の避けて通ることのできない問題であったと思う。

人間を救うものは，「家」やそのつくられた神話ではなくて，「人間」そのものであること，あるいはむしろ「人間」に還ること——Bayard が（ということは，*Sartoris* の時代の Faulkner が，と考えてよいのではないだろうか），このことをふと感じとった瞬間はあったのだといえると思う。彼は深い絶望的な孤独の中で，遠く「物静かな，なつかしく安らかにひびく」"human sounds" を聞きながら，「ぱちぱちとはぜ，光と温かみに満ちた火のまわりに集っている」人々の中へ行きたいと願うのである。(13) しかし彼は，「人々」に対する自分のこの期待を，ただ寂寥から出た束の間の感情としか

(13) *Sartoris*, p. 240.

考えない。それ故，彼にとっての「人々」とは向うの見えないところで物音をたてている，そうした抽象的観念的な存在にしかすぎず，「人間」とは誰のことであり，また何であるかが少しもつきつめられないために，彼の中では黒人は依然として人間ではないのである。黒人小屋で黒人親子と "amicably" にクリスマスを祝いながら，Bayard は，そこにかもし出された「人間同志」的な雰囲気を，一瞬の "illusion" と断じてしまう。(14)

この Bayard の考え方が，必ずしもそっくりそのまま当時の Faulkner の人間観黒人観であったとはいえまい。さほどの間をおかずに出版された次作 *The Sound and the Fury* において，彼は黒人女性 Dilsey を創造して，人間の生き方の一つの典型を示すのである。一年足らずのうちに彼の黒人観が根本から変るとは考えられないのだが，しかしそのことはまた，われわれが *Sartoris* の中に見出すある物の見方，考え方が次作の中にも尾を引いていると考える根拠にもなる。例えば *The Sound and the Fury* の重要なテーマは（*Sartois* と同様），喪われた identity の追求ということであり，ただこの場合，Quentin によって代表される南部の人間は，ほかならぬおのれの属する「家」の下で自分たちが腐れて行き，次第にかたちのさだかでない「亡霊」のようなものになって行く事実を見て恐慌を来たしはするが，なぜ自分たちの「家」がそのように自分たちに重くのしかかるものになったのか，自分たちを頽廃させるものになったのかということについては考えようとしない――つまり「家」が，「名門」が，黒人の人間性の完全な無視の上に出来あがったものであるという事実に遡って考えることを全くしないのであるが，これはある意味で Bayard 的黒人観と共通するものであると言ってよいだろう。だが *The Sound and the Fury* の Quentin は，自分を現に在る「家」に identify させるのではなく，むしろそれを頽廃の根として断ち切ることを心がけることにおいて Bayard の域を脱し，そしてその代りによごれない昔，純潔の南部を幻想してこれにおのれを identify させようとする。これが妹 Caddy に対する彼の愛とその後の自殺の意味であるが，Faulkner が，自分の identity

(14) *Sartoris*, p. 257. 参照.

を「家」にでも幻想の南部にでもなく，「人間」そのものに見出そうとする人物を提示するのは，ようやく *Light in August* においてなのである。このことについては，拙論『*Absalom, Absalom!* における悲劇の構造』においても触れていることなので，ここでその一部を再録して説明の便に供したい。

The Sound and the Fury における Quentin の自殺あるいは incest が，一つには「時間の秩序に根ざしている，肉的生殖の生きた体系」[15]——つまり家系というものの，逆説的な切断による頽廃の根絶やしであったとしても，しかし Quentin にとって処女の Caddy はまさしく幻想的なよごれぬ南部の象徴であったのであり，これに自分を重ね合わせることによって彼はみずからの identity を確立することを夢想したといえるであろう。このとき，incest はやはり肉体についての通常の枠づけを打破する意味を持っているのはたしかであるが，しかし Caddy が，象徴は象徴でも所詮は "a symbol of social distruction[16]" でしかないと悟ったとき，それにもかかわらず彼はおのれを identify させるものとしてこのよごれた南部以外のものを見出しえなかったその絶望のためと，更にはまた，それが何であれみずから選んだものと，もはや夢想的にではなく事実的な完璧さで合一するために，自分の肉体を昇華させざるをえなかったのだということができる。

更に Faulkner は，この問題を Joe Christmas の悲劇を通して最も typical なかたちで提出する。黒なのか白なのか，他人はもちろん自分にさえはっきりしない人間，この文字通りに「自分が何ものであるのかわからぬ」という「最も悲劇的な状況」[17]にいる男は，事実として「もはや人間に属してはいない。」[18]だがこの男について，Faulkner は更に "he deliberately repudiated man.[19]" と説明するとき，それはどういうことを意味しているのであろうか。

---

(15) André Rousseaux, *Littérature du Vingtième Siècle* (Paris: Albin Michel, 1955), pp. 123–4.
(16) Michael Millgate, "The Sound and the Fury," in *Faulkner*, ed., Robert Penn Warren (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1966), p. 103.
(17) Gwynn and Blotner, *Faulkner in the University*, p. 118.
(18) *Ibid.*, p. 97.
(19) *Ibid.*

実作中の Christmas は，「つかまえられることを心づもりにしていたように[20]」して Mottstown にあらわれるばかりでなく，「まるで，じたばたせずに自殺しようと，あらかじめ計画していたみたいに[21]」して死んで行くのだが，このことは，このもはや人間に属していそうにもない正体不明の男が，しかしいまや人々の中へ――一度はみずから拒んだ「人間」の所へ戻ろうと苦闘していること，そしてほかならぬその「人間」に自分を identify させ，自分もまた間違いなく「人間」であることを確認するためにおのれの現身（うつしみ）を昇華させようとしたことを示している。

つまり，彼が一度「故意に人間と縁を切ってみる」のは，実はそれに向って一層強くとび込んで行く，その助走用の距離をとるためだったのだということを Faulkner は告げているといえよう。

さて，このことについての他の研究者の見解はどのようなものであろうか。立場の違いにより提示される結論はもちろんそれぞれに異るが，それに至る考え方の方向に妥当なものがあると思われる一，二を瞥見しつつ，拙論の補足としたい。

すなわち，Peter Swiggart によれば，Quentin の愛と死の根底的意味は「不定あいまいな現実にさからって，一種の永遠のアイデンティティを確立し」，「避けがたい変化と凋落から，みずからの意識を解き放とうとする意図[22]」であったのだし，一方，Joe Christmas の方は，John L. Longley に

---

(20) *Light in Angust* (London: Chatto & Windus, 1968), p. 330.

(21) *Ibid.*, p. 419.

(22) Peter Swiggast, *The Art of Faulkner's Novels* (Austin: University of Texas Press, 1967), pp. 94–5. Swiggart は，Faulkner とピューリタニズムの関係を重視し，それを尺度にして Faulkner 文学全体を計る．このため Quentin は一種 egocentric なピューリタンとしてとらえられ，彼にとって Caddy は彼の内部と周囲の道徳的混沌の象徴にしかすぎず，それ故に彼女における「人を愛せる力」を堕落のようなものにしてしまったのも，むしろ Quentin 自身のこの抽象的な道徳性なのだと考える．全てをピューリタニズムの立場から判断しようとするため，Swiggart の見解にはしばしば無理が目立つが，しかし彼が更に，Quentin は彼自身と家旅の名誉を回復するために，過去を変えられない以上は自分の記憶を変える――つまり，Caddy の身に起ったことは，実は兄たる自分と結ばれたことだ，と思いこむか，そうでなければ自分みずからを破壊してしまうほかにないと考えたのだというとき，その解釈はある妥当性を持って来るといえよう．同書 pp. 90–4 を参照．

よって「彼は積極的に人間との一致を求める[23]」のだが，「問題はどのようにして人間共同体の中へ戻って行くかということであり，それは決して簡単なことではない[24]」と説明される。なぜなら，彼はただ彼自身であること，あるいはむしろただ「人間である彼自身」であること――ただ「人間」として存在する権利を主張するのに対し，「人々は，Christmas の生涯を通じて，彼らがかくあらねばならぬと考えるものに Christmas を仕立てようとする[25]」からである。

例えば Joanna Burden も，彼女と Christmas の関係の終りに，彼が完全なニグロとして生きることをあからさまに強要するのであるが，まさにそのとき彼女は Christmas に殺されてしまう。

ところで，ここで問題を別の方向から眺めてみたい。Christmas の自殺に等しい死の意味が前に述べた通りのものであるならば，彼の殺人行為，この Burden 殺しの意味は何であるのか――目をこの方向に向けてみることにしよう。そしてこれについて考えることはまた当然に，Christmas の（従っておそらくは作者の）愛についての考え方を明らかにして行くことになるだろうと思われる。

さて，この小説の筋の流れからだけいえば，Christmas の Burden 殺害はいかにも唐突であり，そこに一種不自然な飛躍があるようにさえみえるのである。長く音沙汰のない Burden からの連絡を待ちこがれ，ひとり腹を立て，自分と女をけなし，すね，ようやく簡易ベッドの上に女からの紙切れをみつけて有頂天になる Christmas に，われわれはむしろ一途な恋をしている男の初々しさのようなものをさえ見ることができるのだが，これだけひたすらな気持を抱いていた男がなぜ突如として女を殺す気になったのか。このことについて，例えば前述の Longley（あるいは Kenneth E. Richardson）

---

(23) John L. Longley, Jr., "Joe Christmas: The Hero in the Modern World," in *Faulkner*, ed., Robert Penn Warren (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1966), p. 169.

(24) *Ibid.*

(25) *Ibid.*, p. 167. なお Kenneth E. Richardson, *Force and Faith in the Novels of William Faulkner* (The Hague: Mouton & Co., 1967), p. 81 参照.

の「枠づけ」解釈をそのまま持って来て，「彼がニグロとして生きるべく枠づけされたから」などと言ってみても，理由は少しも明らかにならない。先ず，Burden が Christmas にニガーであることを求めたのは，彼らの関係の最後においてだけではなく，その最盛期においてすでにそうであったことを考えなければならない。彼女の情欲は，Christmas がニグロであることによって一層燃えさかったのである。

とすれば，殺しの動機にそうした「枠づけ」解釈を持って来るよりは，むしろ単純に，その一途な思いを裏切られたが故に Christmas は Burden を殺さねばならなかったのだという方が，はるかに読む者を納得させるだろう。この小説はたしかに，「愛を奪われ，何かを見出そうと努めている」人々の物語[26]なのである。そういう説明は三文小説に対するものだという批難はあたらない。男と女の関係においては，三文小説であろうと大小説であろうと，先ず「一途さ」が基本なのであり，このことを嘲ってはどんな愛も描けないし語れないものであることは，知って置くべきであろう。問題は Faulkner がこの「一途さ」にどんな意味を持たせたか，なのである。

おそらく Christmas が Burden に求めたものは，ただ人間の男と女の完全な融合，人間同志の赤裸な触れ合いであったに違いない。ここでの「赤裸」ということばには，ほとんど比喩的な意味は含まれない。先述の Faulkner のことばをもう一度用いるならば，「もはや人間に属していそうにもない」からこそ，彼は必死に他の人間におのれを押しあて，おのれも他も等しく「人間」であることをたしかめようとするのである。このとき，彼と他との間には，二人の接触を妨げるどんな些細な夾雑物もあってはならない。衣服のようなものでさえ，もしそれが完全な触れ合いを邪魔するものとしてあるならば，彼はその衣服を投げ棄てるだろう。（Burden 殺しを実行する直前の夜，「あの女はおれのことを祈りはじめた」[27]と絶望的につぶやきながら，Christmas は女がつけ直したシャツのボタンをポケット・ナイフで切りはな

(26) Gwynn and Blotner, *Faulkner in the University*, p. 59.
(27) *Light in August*, p. 98.

し，更にそのシャツを脱ぎ捨てて素裸のまま冷たい夜気の中に立つ。この行為の象徴するものに目を向けたい。彼はついえた自分の夢を，大きな悲しみと恨みをもって思い起していたのだといえるだろう。）とまれ，みずから射殺されて「人間」の中へ戻って行くという手段をとるのは，彼が男と女の真の触れ合いに失敗したからなのである。彼は先ず愛によって人間たることを確めようとしたのだ。Burden が本性においてどれほど肉欲的であったかなどということはどうでもよいこと，あるいはむしろそれはそれで意味あることでさえあったかもしれない。（真なる性の喜悦は，現実世界における最も実感的な「人間同志の融合」であるともいえるだろう。）問題は彼女が二人の間に「〔床の上の〕膝まづいた跡」[28]——つまり「神」を置くようになったということなのである。人間を求め，そしてその求めに応ずるような女の素振りに引きずりまわされながら，しかし Joe には，結局人間とかかわりのない神が差し出されたのだといえる。

彼が Joanna Burden を殺した理由はまさにこれであった。"She ought not to started praying over me." (sic)[29] と Christmas はいう。「Joe は，彼の人間性と存在するものとしてのリアリティを守るために，Joanna Burden を殺さざるをえなかった」[30]とは，Richardson の見解だが，実際，彼女は Christmas によって自分の肉体の飢餓が満足させられると，今度は彼を罪人（つみびと）に仕立てることによって精神の空白を満たそうとするのであり，彼女の Christmas への接し方は徹頭徹尾利己的なだけで，Christmas は常にただ彼女の肉体と精神をそれぞれ別個に満足させる手段として利用されているだけであるが，しかもそのとき，彼女は自分の行為が「いつでも，神の御意志によって導かれたものという弁疎弁明を用意している」[31]のである。

言い方をかえれば，Lawrance Thompson が "the clash between her

---

(28) *Light in August*, p. 264.
(29) *Ibid.*, p. 104.
(30) Richardson, *Force and Faith in the Novels of William Faulkner*, p. 87.
(31) Lawrance Thompson, *William Faulkner: An Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1967), p. 68.

[Burden's] pleasure in sexual orgies with Joe Christmas and her guilty conviction that such love was a sin against God.[32]" という表現を用いて，Joanna Burden の中では，人間の「肉体」と「精神」がそれぞれ分裂して捉えられていることについて指摘するように，実際，彼女にとって，性は男女の愛と不可分のものではなく，その一部ですらなく，ただ感覚的な快楽を与えるだけのものであったわけで，このことは，事実として彼女には人間の「愛」が不可能であることを示している。[33]

とすれば，Burden という女がこのような愛の不能者であるとも見抜けず，それに一途になった Christmas は救いようのない愚か者ということになるのだろうか。作者が言いたいことはそういうことではあるまい。人間の魂と肉体の問題，女とは何か，男と女とが愛し合うとはどういうことか――具体的にはこうした問題について，Faulkner が Christmas と Burden の関係を通して考えていることをわれわれは見ることができる。

おそらく，Faulkner の最も嫌悪したものは，人間を魂と肉体とそれぞれ分離したものとしてみる考え方であったろう。人間から魂だけを抽出してその生命を絶ち，魂をひからびたものにしたばかりか人間みずからが教条主義のミイラになってしまった例が，*Light in August* の McEachern, Doc Hines であり，そしてある意味において Hightower, Percy Grimm であることは明らかである。（後述するように，喜劇仕立ての *The Hamlet* においては，こうした教条主義者の一人である小学校の臨時教師 Labove が痛烈に揶揄されることになるが，同時にそこでは，Eula という女を設定することによって，人間における肉体だけの強調も同じく嘲けられている。）

Faulkner にとって人間とは常に一つの全体なのであり，その意味で「Faulkner は，魂が神に属し，肉体はサタンに属しているというキリスト教の伝統的教義を拒み，両者は同一のエナージーの比喩的相であるとみる[34]」と

---

(32) Thompson, *William Faulkner*, p. 72.
(33) Richardson ふうにいえば，Faulkner の描く女は，自分の中の性と愛と自由に対する欲望を統合させうる明確な道徳観を持たない，ということになろう．Richardson, *Force and Faith in the Novels of William Faulkner*, pp. 66, 88. 参照．
(34) Thompson, *William Faulkner*, p. 165.

いう Thompson の見解は正しい。とすれば，Fauikner は「愛が肉の動物的本能に根を置くものである」ことを先ずはっきり認識した上で，「霊と肉の分離などは，愛と生命の原初的型態を侮辱し，その品位を下落させるものだ」[35]と考えていたろうとは容易に推測できることである。

だが Faulkner の目には，現実世界の愛が，人間に生命を与え，勇気づけ，人間を変えて行き，更にはそれを救済するものであるどころか，むしろ事実として「侮辱され，品位を落され」たものとして映っていたのではなかろうか。そして多くの研究者が述べるように[36]，Faulkner がその理由を，女の自己中心的性向，その非論理性と非倫理性等々にあると考えていたとみても間違いあるまい。

だが，「作家のなすべき第一のことは，〔個人を憎むときですら〕，人間全体を愛することだ」[37]という Faulkner が，実生活ではあらわにできぬ女性憎悪を，八つ当り的に作品の中でぶちまけたとみることはできない。事実，長野セミナーで彼は次のように語る[38]。

The women that have been unpleasant characters in my books were not created to be unpleasant characters, let alone unpleasant

---

(35) Thompson, *William Faulkner*, p. 173.

(36) Cf. Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (London: Paladin, 1970), p. 299.

(37) Joseph L. Fant and Robert Ashley, eds., *Faulkner at West Point* (New York: Random House, 1969), p. 82. なお *Faulkner in the University*, p. 122 には，これと全く相反するような "I don't think I love people." ということばがみえる．しかし同書 pp. 242–5 の質疑応答からも明らかなように，Faulkner が最も重視したのは，個人——というよりも個々の人間の individuality，その人間をその人間たらしめるもの，であったのであり，彼は，個人が次第にあいまいな抽象概念を看板にする集団の中に繰り込まれ，画一化されて行く現代の趨勢にはげしく抗っていたのである．従って，単なる抽象概念としての「人類」とは，彼にとって「民族」「デモクラシー」「多数者の権利」等と同様意味のないものであり，ましてそうした抽象的人間に対する愛——抽象的な人類愛などということはただの嘘，ことばの遊びでしかなかったろうと思われる。しかし作家として個人に関心を持つにしても，それは先ず第一に，生き，悩み，苦しみ，愛し，歌う——そうした具体的存在である「人間なるもの」，いささかの抽象的なところもない具体的な「人間」という存在に対する愛からしか生れはしない．ウェスト・ポイントでの Faulkner のことばはこの意味であることは明白である．

(38) Robert A. Jelliffe, ed., *Faulkner at Nagano* (Tokyo: Kenkyusha, 1966), pp. 66–7

women. They were used as implements, instruments, to tell a story, which I was trying to tell, which I hoped showed that injustice must exist and you can't just accept it, you got to do something about it. (sic)

「語らんとする物語を語るための手段——道具」ということばに注意したい。このことばには，女性に対する Faulkner の大きな期待がみられる。「道具」とは，使用済みになれば打ち捨ててかえりみないものという意味ではない。現実の女に，黙止できない欠陥があるからこそ，それを声高く告発することによって，女たちにみずからの欠陥を気づかせ，彼女らがそれを克服して，人間としての真の愛を可能にするようになってもらう——つまり真の愛を実現するそのプロセスとして，女たちは一度告発されねばならぬ，というのが Faulkner の真意であったはずである。女たちに欠陥があればあるほど，逆に Faulkner の彼女らに対する期待は増大せざるをえなかったといえるだろう。

愛とはこむずかしい理屈ではない。愛する者同志，互いに完全に「保持し，保持される」こと，相互の完璧な合一——この単純明快な願い以外の何ものでもない。これがつまり，Christmas が Burden に求めた一切であったのである。そして愛がそういうものであるならば，愛する者は，相手を文字通りに保持するために，あるいは時として自分が相手に保持されるために，相手なり自分なりを自分の手で殺さねばならないと考えることもあるはずである。前述した言い方を用いれば，二人の完璧な合一を妨げる障壁となる肉体を——正確にいえば，肉体を障壁と意識するその各自の「意識」を——抹殺するのである。Christmas の Burden 殺しはまた，この「保持し，保持される」という単純で純粋な愛の願いの当然の帰結でもあったわけである。

A Rose for Emily において，Emily が Homer Barron を殺す理由も，まさしくこれであった。更に *That Evening Sun* において，黒人女 Nancy が夫の Jesus に殺されると思い込むのもまた，ある意味で彼女が Jesus のものになり切らされる予感であり，二人の間には，実は他人のうかがい知る

ことのできぬ二人だけの強い愛があったといえるのかもしれない。[39]

(39) Cf. "That Evening Sun," in *These Thirteen* (London: Chatts & Windus, 1963), p. 60. "Jesus always been good to me," Nancy said. "Whenever he had two dollars, one of them was mine."